

令和元年度小松市立月津小学校 学校評価（年度末）

めざす児童生徒像

- ・ 課題に対し粘り強く取り組む子
- ・ 自分の考えを表現し吟味する子
- ・ 友達と協働できる子

※児童生徒達成結果－教員結果・保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策	
				数値・アンケート結果 (%)			数値・アンケート結果 (%)					
				教員	児童生徒	保護者	教員	児童生徒	保護者			
（学校で設定）	協働できる子	行事で協働的に活動している児童の割合を100%にする	① 児童集会	100			91.7			ハッピーフェスティバルを縦割り班で行動する内容としたことで、学年を超えて協働する姿が生まれた。アンケートでも肯定的な回答が96.8%という成果が得られた。3.2%の児童も協働の意味を捉え切れず回答したが、協力して行動できていた。他の行事や委員会の取組は高学年のみの協働活動になってしまった。	ハッピーフェスティバルや運動会など全校が動く行事においては今後も協働する場面を意識して活動を計画していく。また、各委員会の取り組みにも高学年だけでなく全校が関わられるような場面設定を意識して組み込んでいきたい。	
			② 運動会	100	97.8	98.4						
			③ 学校保健委員会				100					
			④ ハッピーフェスティバル				100	96.8				
			集計									
重点項目	業務の改善	すべての項目について肯定する教員の割合を80%以上とする	① 校務分掌や業務の整理・統合が図られており、業務の平準化がなされている。	81.8			66.7			中間の改善策として、分掌部会を開く時間を保証し、分掌部会を機能させるようにし、職員会議の前に企画会議を必ず設け、組織的に学校運営をしてきたことで、②③はA評価が増え改善された。 ①はA・B評価ともに減少しC評価が15.1%増加した。学年や児童会行事、委員会活動等の取り組みは、業務を振り分けることが難しかった。	②③に効果のあった取組は継続する。 ①は業務の平準化を意識できるよう早めの提案を心がける。また、来年度に向けて2月までに分掌ごとに必要な取組を洗い出し、提案できるよう部会の時間を確保する。さらに、担当人数の調整も考慮したい。	
			② 分掌部会を機能させ、職員会議の短縮に努める。	90.9			100					
			③ 提案活動後直ちに振り返り、提案文書を訂正し、業務の改善に努める。	100			100					
			集計									
			集計									
小松市共通重点項目	学校研究	③について そう感じていると答える教員の割合80%以上	① 学校でテーマを決め、講師を招聘するなどの校内研修を行っている。	90.9			91.7			①について、中間ではA評価が36.4%だったのに対し、50%と増加し改善している。 要因としては、研究授業が進んだことや串小学校で行われた田中博史先生の示範授業と講演の研修に全員で参加したことが挙げられる。 ③については、中間から継続して取り組んでいることで、A評価が向上している。	今年度は研究授業や研修計画を立てるのが遅くなったため、1学期に2本しか研究授業を実施できなかった。これが中間の評価が低かった原因だといえる。 改善策としては、4月中に研究授業の時期や模擬授業の時期を決め、計画的に研修を進めていく。	
			② 研究主題に迫る目指す授業像（児童生徒像）を共有し、研究の視点に沿った授業研究会を計画的に行っている。	100			100					
			③ 教職員一人一人が授業研究に取り組み、月津スタイルを共有・実践している。	100			100					
			集計									
			集計									
	指導力の向上	授業	⑥の項目が児童・教員ともに80%以上	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	90.9	96.8	5.9	100	94.1	5.9	⑥について、教員の達成感が得られていると肯定した割合が100%となり、児童の差が2.2と縮まった。児童においては、98.8%から97.8%に減少したものの、D評価は0%となった。 この結果から、中間では「わかったつもり」になった児童が多かったのに対して、学習の理解が深まったといえる。 ③④について、発表力と記述力について教員の評価は、どちらも75%と減少したのに対し、児童の評価は発表力が1.6%減少し、記述力が2.1%増加した。 この結果から、児童はできていると思っているのに対し、教員は発表力や記述力の向上を求めていることがわかる。 原因としては、2学期は図やブロックを操作し、根拠をもとに書く、話すを重点的に行うことを教員で共通理解したことで、教員の意識が高まったことが考えられる。	記述力、発表力の向上は、児童の「やってみよう」「考えてみたい」「話したい」という気持ちを引き出すことが、大切だと考える。 そこで、月津スタイルの3つの項目 ①考えを持ち、動き出せる導入の工夫 ②思考し続ける導入の工夫 ③わかった・できたとなる終末の工夫 について、見直す必要がある。 3学期末までに、話し合い、児童の意欲を引き出すために、月津スタイルをどう見直せばいいのか、全体会を開き、話し合い、来年度の方向性を具体的に持ち全職員で共有する必要がある。
				② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。	100	95.2	4.8	83.3	93.5	10.2		
				③ (発表力) 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	90.9	90.4	0.5	75	89.8	14.8		
				④ (記述力) 児童生徒は、自分の考えを書く機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して書いている。	81.8	91.4	9.6	75	93.5	18.5		
				⑤ 児童生徒は、授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っている。	91	97.9	6.9	100	98.9	1.1		
				⑥ 児童生徒は、「わかった」「できた」と学びに対する達成感を得られている。	90.9	98.9	8	100	97.8	2.2		
	学力の定着	学力調査	④⑤について目標点を達成することができる。	① 学力の重点目標や具体的な取り組みは全教職員で共通理解し、目標を達成できるよう取り組みは徹底して行っている。	100			100			①②については12月に行った小松市学力調査の結果の分析を基に教職員全体で共通理解し、必要な取組をさらに共通実践する。 ③についてはこれから中学に進む6年生を中心に情報交換をしっかりと行い、小中連携を深める。 ④⑤についてはチャレンジタイムを利用し、課題の多い学年では級外が積極的に個別の支援を行い、TTによる学習を継続して進める。また、月津スタンダードを確実に児童全員が達成し、積み残しがないように働きかけ、確認して次年度につなげる。	
				② 学力向上ロードマップにおける各自の役割を教職員が理解し、定期的な検証がなされている。	90.9			100				
				③ 近隣等の小中学校と学力調査の結果や分析、成果や課題を共有している。(小中連携)	72.7			58.3				
				④ 二学期単元末の国語のテストの平均点を低学年は90点、中学年と高学年は85点を目指す。	1年95点2年90点3年75点4年80点5年87点6年88点	1年95点2年89点3年80点4年81点5年87点6年81点						
				⑤ 二学期単元末の算数のテストの平均点を低学年は90点、中学年と高学年は85点を目指す。	1年98点2年84点3年84点4年83点5年84点6年80点	1年97点2年89点3年83点4年81点5年85点6年77点						
	家庭学習	①について児童アンケートの割合を80%以上にする。	① 自分で計画を立てて勉強している。(3年以上)	100	86	72.1	-14	85.7	80.6	67.6	①は中間に比べて教職員、児童、保護者の数値が下がっている。家庭学習強化週間では、計画を立てて学習することに対する児童の○の割合が1回目92.1% 2回目92.1% 3回目91.8%とほぼ同じであるのにアンケートの数値が下がっているのは、計画を立てて学習するという点に対してより高い目標を設定し、取り組むようになったためと考える。	
			② 児童生徒の家庭学習の評価・指導を行っている	100	97.8		-2.2	100	96.8			
			集計									

令和元年度小松市立月津小学校 学校評価 2

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・8月提出）	取組の成果と課題（年度末・3月提出）
生徒指導	〈「学校が楽しい」と回答する児童を80%以上にする〉	・1学期末の段階で「学校が楽しい」児童の割合は75.6%であった。4月初めのアンケートの80.1%と比べ減少した。アンケートの度に「楽しくない」児童個々の理由を明らかにし、対処してきた。 ・アンケートから月津小の問題点を「廊下を走る人が多い」とし、「歩こういいね運動」を実施できた。2学期以降も児童の感じる学校生活における難しさや期待していることをアンケートから読み取り、活動を企画実施する。そうすることで児童の学校生活への充実感が高まるとともに、目標とする児童の姿に近づくと考えている。	・2学期からアンケートの解答項目を4段階に変更し、児童の思いを正確に見とれるようにした。結果、「学校が楽しい」「どちらかといえば楽しい」の肯定的な回答をした児童は94.6%だった。否定的な回答をした児童には担任が聞き取りを行い、行動をよく見るようにしたことで、早期に問題に気づき対応することができた。 ・元気のいいあいさつを目指し「あいさつハイタッチ運動」に取り組んだ。ハイタッチを通して明るい雰囲気づくりや異学年交流をすることができた。活動は盛り上がったが一過性のものになっていることが課題である。年間を通して継続する活動や計画的な活動の設定に取り組む。
	・児童会を中心に、学校生活アンケートの結果を分析し、課題を見つけその解決につながるような取組を企画・実施する。 ・「自分からあいさつ」「全校が仲良く」「感謝の気持ちを伝える」ができる月津小につながるような活動を、児童会中心に広げていく。		
特別支援教育	〈児童の未来を考え、特別支援教育の理解の向上を目指す〉	・「特別支援教育の理解が深まり、組織的な対応ができていく」について教職員アンケートでは、「そう思う」が75%であった。また、「関係機関との連携を図る」について教職員アンケートでは、「そう思う」が83%であった。担任から気になる児童の相談があった場合、その症状に応じて専門機関と連絡をとり、対応してきた。これからも、校内の心の相談員やスクールカウンセラーにも協力していただき、さらに、児童理解について深められるよう関係機関とも連携して取り組む。	・教職員アンケートでは、「特別支援教育の理解が深まり、組織的な対応ができていく」について「そう思う」が75%、「関係機関との連携を図る」について「そう思う」が83%で中間と同じ結果であった。「まあまあそう思う」を含めるとどちらも100%であった。担任から気になる児童の相談があった時は、全校で共有し専門機関と連絡を取って対処してきた。また、心の相談員やスクールカウンセラー、支援員にも協力していただき児童に対応できた。これからも校内委員会を機能させ関係機関と連携をとりながら取り組む。
	・長期的・短期的な支援計画を立てて、特別支援教育校内委員会を通して児童の理解を深める。 ・特別支援教育校内委員会や児童理解を計画通り実施し、関係機関とも連携をとりながら進める。		
道徳教育	〈「考え」「議論する」道徳授業の実践を目指す〉	・道徳推進教師を中心に、板書や問い返しの仕方についての職員研修を行った。 ・職員会議等を通し、振り返りを記録し、評価にいかしたり、重点項目を中心に、項目もれが無いよう声をかけるようにした。 ・これまで2回の授業参観で、5学級が道徳を実施している。	・研修をもとに、各担任が児童の実態に合わせて問い返しや振り返り、板書の仕方を工夫して授業を行うことができたが、全員で共有する場がなかったため、来年度からは「考え」「議論する」道徳の授業の実践についてどんなことに取り組んだのかを共有する場を持つ。 ・定期的に声掛けをしたり、指導計画綴りに年間計画を綴ってチェックすることで、項目もれなく進められた。 ・授業参観では、全学級が道徳を実施した。
	・道徳推進教師を中心に研修を行い、職員に還元することで道徳授業を充実させる。 ・振り返りを記録に残し、評価にいかす。 ・重点項目を中心に項目にもれが無いように取り組む。		
読書教育	〈読書の質的な向上を図る〉	・「おすすめ10さつ」の取り組みについては、全校で約70%の児童が達成することができた。学年によって達成状況が異なるので、引き続き声かけを行う。また達成できた児童については、図書委員会を中心に本の紹介や読み聞かせなどを通して読書の幅を広げられるような取り組み等を行う。 ・図書ボランティア等の読み聞かせによって、児童たちは普段触れ合うことがない本への興味や関心を持つことができた。	・2学期末には、ほとんどの児童が「おすすめ10さつ」の取組を達成することができた。全校読書フェスティバルや図書委員の企画等も積極的に行った結果、さまざまなジャンルの本を手取る児童が増え、児童の読書の質の向上につながったと考える。 ・図書ボランティアや教員から読み聞かせやおすすめの紹介を行った。しかし、高学年においては例年に比べ図書館利用での貸出冊数が減少した。次年度は、読書の時間の確保や定期的な図書室利用について、年度当初から計画的に進める。
	・全員が「おすすめ10さつ」を達成する。 ・図書ボランティア・司書・担任などが読み聞かせやブックトークを通して、良書に触れる機会を設定する。		
保健安全教育	〈メディア機器とうまく付き合う方法を考える〉	・1学期の児童アンケートでは「月津メディアルールを守っている」は86.1%が達成でき、Aという結果だった。保護者アンケートでも、95.3%が守れているという結果だった。これは折に触れ（ミニ保健指導も含め）、メディアのし過ぎは健康に良くないという話をしてきた成果と言える。しかし、学年が上がるにつれ休日にやりすぎる傾向がみられるので、2学期に行われる学校保健委員会などを通して、さらに呼びかけを図っていききたい。	・2学期アンケートでは、児童82.8%・保護者92.5%が「達成できた」「大体達成できた」と回答し、引き続きAであったが、若干数値が下がった。学校保健委員会で「メディアが体（脳）に与える影響」について講演を行い保護者にも啓発したが、まだ十分とは言えなかった。それでも「全く守れていない」と答えた児童が減ったことから、使い過ぎていた児童には効果があったといえる。小学生サミットで発表した「メディアルール啓発動画」を全校で視聴するなど、メディアルールの徹底をさらに図っていききたい。 ・定期的に保健指導を行ったりアンケートをとったりして、今後も「メディアルール」の呼びかけを継続していく。
	・学校保健委員会や児童保健委員会が中心になり、昨年度決めた「メディアルール」の徹底を図る。 （各学期に1回アンケートをとり、80%以上をA、60%以上をB、60%未満をCとする） ・体重測定時に、メディアと体に関する「ミニ保健指導」を実施する。		
キャリア教育	〈計画的段階的にキャリア教育を推進する〉	・各担任の先生方への呼びかけを行い、学年に応じたキャリア教育の目標を選択することを提案した。段階に応じて必要な学びを意識すること、また目標を掲示することで縦のつながりを知った上で指導することで、学校全体でキャリア教育を推進していく。 ・キャリア教育担当を中心に、推進のための具体的な取り組みなどについて共有するための職員研修を行った。	・学年やクラスの実態に応じた目標選択の声掛けをすることで、各担任の先生方にキャリア教育という視点を確認してもらい一歩とできた。 ・その後の目標の見直しや、推進のための具体的な取り組みをコーディネートすることができなかった。計画的にキャリア教育の視点からの取り組みを企画し、推進していく。
	・学校外部の講師の方や地域の先生方を招聘し、体験活動をしたり仕事に向き合う姿勢を学んだりする。 ・各学年で目標を選び、計画的段階的にキャリア教育を進めていく意識を共有する。		
情報教育	〈PCスキルの向上をねらいとした授業時数が目標時数を上回っている〉	・各学年の総合的な学習の時間等でPCスキルを指導する時間を取っている。 ・研修で得た情報を共有するために、プログラミングのOJTを8月29日に実施する。 ・まだ、教育センターのインストラクターを活用していないので、2・3学期に積極的に活用していきたい。各学年の利用計画を立て、月ごとにどの学年が活用するかを明確にする。 ・パソコンルームのPCや職員室に置いてあるカメラは整頓されているので、現状を維持できるようにする。	・各学年でPCスキルを身につける時間をとることができた。 ・インストラクターを招聘して授業を行う学級もあった。今後、インストラクターを全学級で活用する。 ・ビデオカメラやデジタルカメラのSDカードにデータが残っているものが多いため、記録をPCに移したらすぐにデータを消すことを職員に知らせ、徹底していく。 ・PCやデジタルカメラ、ビデオカメラは使いやすいように整頓されているので継続していく。
	・各学年につけたいPCスキルを各学年の教員に具体的に示し、共通理解を図る。 ・教育センターのインストラクターを積極的に活用していくよう働きかける。 ・メディア機器やPCの環境を整え、児童・教員ともに利用しやすいように整備する。		
家庭・地域の連携	〈児童会活動やふるさと教育を通して時と場に応じた挨拶ができる〉	・朝の挨拶運動は、児童会を中心に大きな声で挨拶する姿が当たり前になってきた。反面それ以前に登校する児童の挨拶に元気がなくなった。2学期始めグッドマナーキャンペーン等を通し、気持ちの良い挨拶を体験させたい。 ・1学期のふるさと学習は、地域の様子をつかむ段階であった。2学期のふるさと学習は地域の方と触れ合う計画なので、人と人を繋ぐあいさつを実践させたい。 ・「家で互いに挨拶をする」は保護者97.4%、「自分から挨拶する」児童は96.8%であり、育友会総会や広報等での啓発がよい結果に繋がっている。	・2学期初め児童の挨拶は、明るくとても元気があった。また校長からの集会時の話により、目を合わせて挨拶できる児童が増えた。しかし自分から進んで挨拶できる児童は少ない。児童会で挨拶運動に取り組んだ期間は元気な挨拶が行きかったが、取組が終わるとすぼんだ。 ・児童がふるさとへの良さに気づくには、指導者がそれに気づいてほしいと願う仕組む必要がある。ふるさとの何を学ばせたいのかを確認したい。 ・家庭において挨拶をすることが微増している。取組を続け、家庭からも挨拶が広がるようにしたい。
	・朝の挨拶運動を振り返り、何のためにしているのかを確認したうえで、児童会活動を通して運動を推進する。 ・総合的な学習の時間に人を含めたふるさとの良さに触れ、よりよい地域の担い手として必要な挨拶の大切さに気付かせる。 ・家庭や地域において、挨拶ができるようアンケート等を通して啓発する。		
学校関係者評価	<p>・働き方や業務の改善として、職員会議を審議の場でないことを周知し、会議自体の回数を減らすことも視野に入るとよい。</p> <p>・家庭学習について、学力を上げるのは基本的には学校での学習であり、家庭学習はそれを補うものである。何のためにしているのかを学校で確認してほしい。子どもたちは毎日忙しく、習い事と家庭学習をがんばっている。教員同士で話し合い、学年に応じた課題を出してほしい。また、教員だけでなく、児童のワークライフバランスも考慮してほしい。</p> <p>・生徒指導において、「学校が楽しい」児童の割合が、75.6%は低い。それはどうしてかを明らかにし、対応してほしい。9割が「学校は楽しい」と思うようになってほしい。</p> <p>・2学期に地域の人に来てもらうことが多いという活動は、とてもよい。額見町に九谷焼の絵師さんがいるので、活用するとよい。⇒4年生見学済み（2月）</p> <p>・「働き方や業務の改善」①業務の平準化の項目では81.8%⇒66.7%となっているが、職員の不公平感の原因を探り、次年度の計画を立てるとよい。</p> <p>・「読書教育」について、高学年の貸し出し数が減少したようであるが、本は足りているかを把握し、本好きな子どもを育ててほしい。</p> <p>・「キャリア教育」について、体験学習を入れた計画をしキャリア教育の充実を図ってほしい。</p> <p>・挨拶について、授業参観等の様子から、お客さんや来校者への挨拶についても指導し、いつだれに対しても挨拶のできる子を育ててほしい。</p> <p>・「教職員アンケート」から、考えることや発表、記述等の項目の肯定感の割合の減少が大きいが、次年度の学校研究の計画がしっかりとされているので、改善できるのではないかと「保護者アンケートコメントから」</p> <p>・特別教室の使い方について（衛生面、安全面）職員で共有すべきである。</p> <p>・児童の生活のルールや学習規律などの守り切れていないことは、保護者から情報を得たので、しっかりと指導してほしい。</p> <p>・登校渋りの際・相談したとき等の対応がよいということや学校に楽しく通っているということを思い表現してくれる保護者がいるのは素晴らしい。</p>		